

日本福祉のまちづくり学会北海道セミナー 観光地におけるバリアフリー

2011年1月8日、日本福祉のまちづくり学会北海道支部のセミナーが札幌市で開催されました。日本福祉のまちづくり学会は、市民の生活基盤づくりに関係するあらゆる分野の方々が結集し、市民生活の機会均等と生活の質の向上に向けた新たな「福祉のまちづくり」の枠組みづくり、研究開発に向けた取り組みを目指している学会です。北海道支部では、毎年数回のセミナーを開催しており、今回は「観光地におけるバリアフリー」をテーマに行いました。

講演1

観光のユニバーサルデザイン

～歴史都市と世界遺産のバリアフリー～

総合的に問題を考える

観光ユニバーサルデザインに入る前に、一つ、大切なこととお話しします。中心市街地の活性化は、観光と結びついています。大事なことは、まちをよくしない限り、いくら人を呼んでも次は来なくなるということです。まちをよくするためには観光まちづくりが必要であり、その一部に観光ユニバーサルデザインがある、と私はとらえています。そういった意味では全部つながっていますので、観光ユニバーサルデザインだけを取り扱うのはなかなか難しいと思います。ですから、総合的に問題を考えていきましょう。

基本的に観光とは何かをお話しますと、その場所の優れた宝をどこまで活かし切れるかだと思います。ま



秋山 哲男 氏
日本福祉のまちづくり学会
副会長、前首都大学東京
教授

た、「ツーリズム＝ろくろのように巡回する」という言葉が観光の語源だそうです。さまざまなものを移動して観る、例えばシーニックバイウェイ、まさにこの“ろくろ”のようなものだと思います。

観光のユニバーサルデザイン

観光まちづくりを考えると、切っても切れない関係が世界遺産ですが、今日の中でも文化遺産を中心にお話したいと思います。

観光のユニバーサルデザインの考え方ですが、これには七つの原則があります。①公平性、②自由度、③単純性、④わかりやすさ、⑤安全性、⑥省体力、⑦スペース確保です。簡単にいうと「人々が使いやすい」「できるだけ多くの人が使いやすい」などがユニバーサルデザインです。

そして、ユニバーサルデザインの達成方法が三つあります。①汎用性：一つの施設や設備をできるだけ多くの人が使えるようにすること。②ベストオプション：基本仕様を共通化し、個人に合わせたオプションを加えること。例えば、住宅でいえば、最初に作る住宅で車いす対応にすべきかどうかといったときに、いつでも対応できるよう直前まで作り上げておき、本当に必要になったときにはちょっとした改造でできるといったこと。③代替手段：他の方法で代替する。例えば、鉄道に乗れない人に対して別の交通手段を用意することです。

ユニバーサルデザインの7つの原則

分類	7つの原則	具体的内容
平等	①公平な利用	使う人によって不利にならないこと。
	②使用における柔軟性	フレキシビリティ(自由度)があること。
	③単純で直感的な使用	使い方が簡単ですぐ分かること。
デザイン	④明確な情報	必要な情報がすぐに理解できること。 unnecessaryなものを省きシンプルで、直感で分かるデザインであること。
	⑤間違えに対する寛容	デザインが原因の事故をなくすこと。うっかりミスや危険につながらないデザインであること。
	⑥少ない身体的な負担	無理な姿勢をとることなく、余計な力を使わずに少ない力でも楽に使用できること。
空間確保	⑦接近や使用のためのスペースとサイズ	アクセスしやすいスペースの広さと十分なサイズの大きさを確保すること。

そして、もう一つ重要なことがあります。一般的に、障がいを持つ人が旅行をしようとする、お金がたくさんかかります。団体ツアーのスピードにはついていけない、スペシャルなツアーはお金がかかる、個人で行く場合も家族や友人など介助者の介助費用がかかる、など健常者の3倍ぐらいはかかります。このような、たくさんお金がかかることをできるだけ少なくするということがとても大切です。これからのユニバーサルツーリズムはこういったことを考えなければいけません。

ユニバーサルなシームレス化

そして、バリアフリーだけでは行き届かない整備をシームレス化しなければなりません。例えば、段差だけ解消すればよいのではなく、歩く距離が長い、あるいは3時間待ってもバスが来ないというのもシームレスではないのです。こういったことを解決していきましょう、これが「ユニバーサルなシームレス化」です。移動では、公共交通を使えば、余分なお金を使わずに、便利に移動ができるはずですから、これからの観光では公共交通に頑張ってもらいたいと思っています。

さて、バリアフリー化ですが、まず垂直移動を整備しなければいけません。これはバスやプラットフォームからの乗り込みです。また、段差のない車両でないといけません。例えば、台湾の新幹線では通路側二席を障がい者対応にしています。日本では片側の座席のスペースしかないものがほとんどです。また、特急列車とかになりますと、車いすの方が乗り込めないという問題もあります。車両の寿命が約50年ですので、まだしばらく続くと考えるとちょっと心配です。また、シームレス化では、空間的な不連続、時間的な不連続、料金の不連続といった問題があります。もっと各交通機関が協力してユニバーサルな交通社会を考えてほしいと思います。

また、観光という面では、町並みも重要です。統一感ある町並みを作るなど、景観的に頑張っているとこ

ろには人が来ますし、そうすると奇麗に維持することを要求されるのでさらに人が来ます。加えて、観光地を回れるような交通手段も大切です。貸し自転車やセグウェイ、馬車など、地域に合わせてさまざまなものがありますが、デザインも重視して検討していきたいですね。

講演 2

高齢者・障がい者の立場から見た 観光地のユニバーサルデザイン



下間 啓子 氏
NPO法人旅とびあ北海道
代表理事

旅はリハビリ

観光地のユニバーサルデザインとしては、バリアフリー情報あるいは交通手段などの情報と移動に関わるシステム化がされているかどうか、観光地が魅力的であっても行けるのかどうか、安心安全快適なのか、というところがデザイン的に要求されてきます。目的地の観光地あるいは観光施設、宿泊施設、レストラン、途中で立ち寄るトイレ等のバリアフリー、それにかかるA地点からB地点までの移動手段と移動時間、また旅行のツアー費など、それらをひっくるめて行ってみようかなということかと思えます。旅先で初めて出会ういろいろな人々、サポートを提供してくれる人々のほかに、風だとか匂いだとかもあります。感動を共有したり、また自分のできごと挑戦すると、「旅はリハビリ」といわれてきています。旅を通して生きてよかった、あるいは残された人生を生きるエネルギーをもって暮らしていけるかということにも、旅は重要な役割を担っているのではないかと考えています。そのこと自体が旅先から帰ってきたときに地域のノーマライゼーション^{※1}にも貢献していける、日本あるいは海外を旅行して帰ってくる体験がそういった形の地域の貢献にもつながってくるのかなと思います。



ホームの乗り込み装置(クリバチ)



ホームドアと乗降の安全



トラベルサポーター養成講座の様子

※1 ノーマライゼーション(normalization)
障がい者にすべての人がもつ通常の生活をおくる権利を可能な限り保障することを目標に社会福祉をすすめること。

ユニバーサルツーリズムの動向

ユニバーサルツーリズムの全国各地の動きを紹介します。今、現地の住民の方たちにお世話をいただきながら周遊型ツアーができるように、トラベルサポートセンターを北海道に設置しようという仕組みづくりに向けて話し合いが始まっています。

私たち「旅とぴあ」では、トラベルサポーター養成講座を開催しています。養成講座では、座学で高齢者障がい者の理解と対応、スケジュールによってどんなサポートをしていくのかということを勉強した後、実際に観光地へ出かけて、列車のバリアフリー対応の体験をしたり、まちに繰り出して歩行者天国を歩いたり、介護実技をします。

全国的な動きとしては、神戸で福祉事業をしているNPO法人のグループが旅行業第2種を取得し、国内外の旅行の企画販売事業を開始しました。北海道では旅行代理店が担ってきていますが、高額で、介助者が必要、家族の都合がつかない、現地にサポーターがいないなど、さまざまな理由があってなかなか頻繁にはできません。そこを神戸のNPO法人が、例えば旭川の「旅とぴあ」が北海道旅行を企画したときには神戸で販売をします、その逆もできますよといったことを始めています。

また現在、全国の12～13団体が全国のバリアフリー調査をしています。今年の4月以降になると思いますが、ウェブ上でその調査結果、例えば北海道だったらの地域にどのホテルがバリアフリーされているとか、どの程度まで進んでいるかというような情報が

アップされる予定です。

また、日本ユニバーサルツーリズム推進ネットワークという準備組織が1年ほど前からできていて、今年の夏ぐらいまでには法人化して全国ネットワークとして動き出そうとしています。全国津々浦々、ユニバーサルツーリズムの展開がもう間もなく始まる時代が日本にやっとなってきました。

障がい別のユニバーサルデザイン

秋山先生の本『観光のユニバーサルデザイン*2』を参考にして、障がい別の観光地のユニバーサルデザインについて私なりに表にしてみました。歴史的町並みや自然遺産などの観光地へはどの部分の障がいがある人たちでも行きたいのは皆同じですが、特に石畳や人が多く集まる場所はどの障がいがある人たちも非常に苦手です。それをどんな形でユニバーサルデザインしていくのかということで、行く人たちが増えていきます。観光地の安全安心快適な空間の確保では、車の乗り入れ制限と歩行空間の確保がされているところは、どの障がいのある人たちも安心して計画できたり散策できたりします。ただ、段差の解消がどの障がいのある人でもOKなのかといいますと、視覚障がいのある方たちはある意味では多少メリハリがあった方がいいのです。そういう意味ではバラバラではなくて統一感を持った点字ブロックや段差をもつことが視覚障がいのある人たちにとっては便利な場合もあります。

観光地を移動しやすくするツールとしては、どの障がいのある人たちも単独での車を利用しての移動が好まれます。

観光地のUDと障がい別対応可能度チェック

(◎対応可能 ○やや可能 △どちらとも言えない ×低い ※それぞれ何らかの支援が必要となるが多い)

観光地のユニバーサルデザイン	車いす 高齢者	視覚	聴覚	知的・ 自閉症
1歴史的町並み、自然遺産などの観光地				
①建築物内部の段差や階段・通路、道路・広場の石畳	×	△	◎	×
②山道や木道を歩く、川や海で遊ぶ	×	△	△	△
2観光地の安全・快適な空間の確保				
①車の乗り入れ制限と歩行空間の確保	◎	◎	◎	△
②バリアフリー(段差解消)	◎	△	◎	△
③パーク＆ライド/ウォーク (世界遺産等の保存と歩行者の安全確保のため 外側に駐車し、バスや徒歩で行く)	△	△	◎	△
3観光地を移動しやすくするツール				
①車 ②人力車等	◎◎	△×	◎×	◎×
③船 ④観光バス	△△	△×	△×	××
4お城・寺院・庭園等のバリアフリー(歴史的価値・景観とのバランスを考慮)				
①城・寺院・庭園の 段差・スロープ・エレベーター等	◎	◎	◎	△
5ホテル、温泉宿、民宿、民泊等のバリアフリー	◎	◎	△	×
6移動手段、移動距離、トイレタイムの関与	◎	◎	◎	◎
7その他 トータル的なUD化				



*2 『観光のユニバーサルデザイン
～歴史年都市と世界遺産のバリアフリー～』
秋山哲夫、松原悟朗、清水政司、伊澤岬、江守央著、
2010年、学芸出版社。

人力車も実は観光案内としては関心度が高い。ちょうどいい目線の高さで地元の案内人との会話は旅の思い出も深まる機会でもあります。人力車を車椅子からそのままスライドした形で乗れる高さに改良してもらったら、もっと利用価値が上がるのではないかと思います。船では、大きい船ですとエレベーターが付いたりして、職員の人たちが持ち上げてくれるような支援システムができています。観光循環バスは階段が狭く、車椅子の人は乗れないといったことがあります。海外の観光バスでは、スロープが付いていたりして、歩道と同じような高さで1階までは入っていただけるので、日本の観光バスはまだ課題があります。

次に、お城・寺院・庭園等のバリアフリーですが、スロープ・エレベーターがあってもかなり大回りしなきゃいけない、あるいは帰り道がわからなくなるような場所が多いのです。

ホテルでは、大きなホテルの人の多さと深めの毛のじゅうたんが苦手で、小さな民宿にしたいという方がいますが、泊まる部屋が2階以上になって食堂やお風呂が1階というような民宿が多いのです。階段の幅が広ければなんとか手を借りて部屋までということになりますが、お風呂と食堂、朝晩皆さんの手を借りることになるので、そこまでして行きたくないという声も結構多くあります。また、外出の移動距離としてユニバーサルのトイレがあるところが30分後なのか、1時間後なのか、その距離と時間が結構大事です。

トータルのユニバーサルデザイン化

トータルのユニバーサルデザイン化として、これまでの体験を×や△で記しましたが、ほとんど○になるよう、先ほど秋山先生もおっしゃっていましたが、観光のまちづくりが大事になってくるのかと思います。もっといろいろな人たちがいろいろな地域からいろいろなところへ移動しながら観光していただける、そんなまちができたらいいなと思います。

毎年首都圏から全盲のご夫婦が秋に北海道に来られます。今回は大胆にということで、魚釣りに行ってみ

ました。何が楽しかったですかと聞くと、湖まで行く途中のぬかみ歩いたことが楽しかったそうです。目が見えないからサポートする人は危険のないところばかり連れていく、そういった意味では本当に自然を楽しもうと思ったときに、そっちは危ないからこっちというようなところを紹介すると、本当のだご味が体験できなくて、この方の場合はこのぬかみ体験が一番よかったというのです。障がいを持たれた人たちと旅に出かけてみると、意外なところに本当の喜びがあったりしますが、「危ないよ、危ないよ」と言い過ぎる楽しみを体験しない旅行も結構多いのかなと思います。本当の楽しみは実際体験してみないとわからないですよ。

「旅友」関係で楽しい旅を

さて最後になりますが、バリアがあってもみんなと一緒にいることで、家にいるよりも出かけられるというところに満足感、達成感があったり、せめて旅行中は家族を介護から解放させたい、旅先で家族がさつき行ったところでこんな楽しいことがあった、こんなおいしいものに出会ったと喜んでいいることに対して、自分が幸せを感じる、日ごろ介護をしてもらっているのをなんとか恩返しする機会にもなっていると感じています。それから、お世話になることをなかなか受け入れられない人たちが多くですが、「旅とぴあ」の語源は旅と友達「旅友」でして、初めて会った人でも旅は楽しく過ごしましょうということでは、お世話する人・される人ではなくて、旅友関係になって、お世話になるということも喜びの一つになっていけるよう、バリアがない関係が築けるようになったときの喜びもあるのかなと思います。旅での体験が楽しい思い出としていつまでも心に残って、明日も頑張ろうと思えるような、楽しい旅を提供していきたいですし、今後もさらに勉強していかなければいけないなと思っています。

(社)北海道開発技術センター調査研究部研究員
鹿野たか嶺・工藤みゆき)